

ペトラルカの“Secretum”について

林 和 宏

フランチェスコ・ペトラルカ (1304-74) は、ふつう、イタリアの大詩人、人文主義の先駆者と呼ばれているけれども、ペトラルカ自身は詩人および倫理哲学者をもって任じ、当時の人びとからもそのようにみなされていたことは、今日あまり知られていない¹⁾。ただしここでいう詩人とは、私たちになじみ深い抒情詩集『カンツォニエーレ』の著者を指すのではなく、長篇叙事詩『アフリカ』によって桂冠の榮譽に輝いたラテン語詩人としてのそれであった。一方、倫理哲学者としてのペトラルカは、数冊の道德論、複数の論争文、歴大な書簡など多方面に及ぶラテン語著作にその姿を見せる。なかでも、本稿で検討する“Secretum”は最もまとまった作品と言えるだろう。しかし本書を必ずしも倫理哲学の書として扱うつもりはない。ともあれ、“Secretum”を理解するうえで重要な問題の少なくとも一つを、指摘してみたいと思う。

“Secretum”は 1342 年から翌 43 年にかけての冬にまず書かれ、ペトラルカの常にたがわず後年、幾度か手が加えられた。だが他の著作と異なり、生前においては発表されず、死後はじめて世に知られた。“Secretum”すなわち『秘密』と呼び習わされてきた理由の一端はこんなところにも求められるだろうか。正式な書名は De secreto conflictu curarum mearum、かつて『わが心の秘めたる戦いについて』²⁾と訳されたことがある。

ペトラルカの最も敬愛する人物が聖アウグスティヌスであったことはよく知られているが、“Secretum”はそのキリスト教会最大の教父との対話形式で書かれ、さながら、悩める信者が聴罪司祭を相手に行なう罪の告白とでもいうべき内容になっている。心の師アウグスティヌスの『告白』が意識されていることは明らかであり、この大著が教父の赤裸々な魂の記録として読み継がれるように、“Secretum”が大詩人の内面の秘密を知る恰好の書とみなされて、『カンツォニエーレ』を除けば、ペトラルカの著作のなかで最も有名な作品たりえているのも、もともとだと思われる。しかし、このような受け取り方がペトラルカの性質なり性格なりを論ずる方向へ向かうとするならば、問題なしとしない。この点はのちに触れるつもりである。

“Secretum”を考える場合、アウグスティヌスを一つの柱とすれば、残るもう一つの柱を見落とすわけにはいかない。いや、夥しい引用の仕方を見れば、それはあまりにも歴然と示されている。引用される主な著者を挙げれば、キケロー、セネカ、ウェルギリウス、ホラティウス、オウィディウスといったアウグスティヌスにも親しい古代ローマの哲学者や詩人たちである。

対話はこれらローマ古典のいわば森のなかで展開する。ただし、詩の章句はもっぱら哲学的解釈が施されるので、この場合、もう一つの柱というのは古代ローマの倫理哲学と規定しておいたほうがよいかもしれない。本稿の冒頭で倫理哲学者ペトラルカに注意を向けた所以である。ところで、それではなぜ今日それが問題にされないのか。結論を急ぐならば、ペトラルカ独自の思想が見られないからであろう。“Secretum”についてもそれはあてはまる。だがこのことを嘆くのは控えたい。なぜならペトラルカは親しい友人たちからキケローの渾名で呼ばれていたものであり、その傾倒ぶりから推して本人も喜んで自称したであろうことは想像に難くないからだ。言うまでもなくキケローは、ギリシア哲学の偉大な紹介者ではあったが、独自の思想家ではなかった。

ペトラルカ独自の倫理哲学を“Secretum”のなかを求める必要はない。ローマ古典に対する志向それじたいに意義はあるだろう。ペトラルカ研究の長い道のりの過程で、倫理哲学者の名称が消え、それに取って代わるかのように人文主義の先駆者という規定が現われたのは、正しい判断であったと思う。この観点から“Secretum”を眺めるとき問題になるのは、基本的には前述の二つの柱、すなわちアウグスティヌスと古代ローマの倫理哲学である。そしてここから、教父哲学と古代哲学の混淆を指摘することも可能となるであろう³⁾。あるいはまた、アウグスティヌスを聖トマス・アキナスと対比させ、キケローやセネカをペトラルカに倣ってプラトンに連なるものとみなすならば、中世からルネサンスにかけて西欧思想界を二分した、いわゆるプラトン主義とアリストテレス主義の対立のなかで、ペトラルカが前者に与したことを裏づける重要な証しの一つを“Secretum”は提供するであろう。いずれにせよ、人文主義者の側面からペトラルカを語ろうとするとき、“Secretum”は非常に魅力的な作品と言える。しかし、ここに来て私たちは、一つの素朴な問いを発せずにはいられない。そもそもペトラルカはなぜ古典古代に関心を寄せたのか。素朴であるだけ厄介なこの難問を解くことが本稿の直接の目的ではないけれども、“Secretum”が充分に解明されるならば、おのずとその手がかりは与えられるだろう。いまや“Secretum”の内容が、さらに立ち入って検討されなければならない。

“Secretum”は、まず「序」があり、ついで本論と呼ぶべきアウグスティヌスとの対話が三巻に構成されている。対話に至るいきさつが「序」に語られているので、まずそのあらましを述べておこう。

いつものように「私」がみずからの過ち多い人生に思いを致していると、どこからともなく一人の女性が目の前に現われた。この世の者とも思えぬそのあまりのまぶしさに気後れし、うつむいていると、彼女のほうから声をかけて言うには、「おまえの過ちに憐みを覚えて、はるばる救いの手をさしのべに降りてきたのです」。彼女は、叙事詩『アフリカ』のなかで「私」も歌

ったことのある真理の女神だった。女神に促されるままに言葉を交わし始め、しだいに顔も直視できるようになった。するとその傍らに佇む一人の威厳に満ちた老人の姿が目に入った。問うまでもなく、誉れ高いアウグスティヌスに違いなかった。瞑想に耽る聖人に向かって女神は、この世にあったときの苦難を思い起こして、死に瀕した「私」の病いを治してくれるようにと、懇願した。師父は承諾し、「私」を温かく励ましながら、女神のあとについて人里離れた場所へ導いた。そして三日にわたり、彼女が黙って見守るなかで対話を繰り返してひろげた。時世に対する批判や死すべき人間に共通の罪について大いに語りあったので、「私」一個に対する、というよりもむしろ人類全体に対する告発の観があった。とはいえ、「私」の記憶にひときわ深く刻まれたのは、やはり「私」をめぐるなされた議論であった。この親密な対話を忘却しないためにこの小著を書いた。だがこれによって名声を得るつもりはない。折にふれて読み返し、対話のさいに経験したあの甘美な思いを再び味わいたいだけだ。この小著が人びとの群れを避けて「私」の許に留まることを望む。なぜならそれは「私」の「秘密」であり、またそのように呼ばれることになるからだ。なお、対話の書き表わし方としては、発言者の名を頭に出すだけにし、「と言った」は省いた。この書き方はキケローから学んだ。だがその彼もプラトンから学んだのである。さて、まずアウグスティヌスが話を切りだした。

「序」の内容はほぼ上のように要約される。ここには、すでに対話の基本的性格が十分に窺われる、というよりもむしろ、“Secretum”を一個の作品たらしめようとする作者の意図が如実に示されている、と言うべきか。主な問題点を拾えば、キケローとプラトンへの言及は、無論、表記上の技術に留まらず、対話篇の伝統が意識されているだろうし、おそらくさらに、倫理哲学の領域においてプラトンからキケローへと下る流れの延長上に“Secretum”を位置づけていることの示唆として読めるだろう。また対話を行なうにあたって俗世間から遠く離れた場所が選ばれた意図も、おそらくペトラルカの社会における生き方と結びつけて問題にされる必要があるだろう。あるいはまた、ふたりが時世や人間一般の罪をめぐる語りあったと述べていることは、すぐにつづけて中心的議題はあくまでもペトラルカ個人の罪であると断られているにもかかわらず、大いに気になる点である。まだこのほかにも興味深い問題を引きだしうるであろうが、いまはつぎの点に特別の注意を払っておきたい。

「序」の述べるところによれば、ペトラルカがみずからの罪深い生活に思いを致しているとき、心配した真理の女神が天上から降りてきて、ペトラルカの敬愛するアウグスティヌスに哀れな彼を救うよう懇願した。そしてふたりの対話は三日間にわたってつづいた。このように見れば、誰しもダンテの『神曲』を想起せずにはいられないだろう。ダンテの場合には、正道をはずれて暗い森に迷い込んでいたときに、天上でそれを憐んだベアトリーチェの懇願によって、ウェルギリウスが彼を救うために現われ、その案内で地獄、煉獄、天国の三界をめぐる

旅へと出発する。周知のように、『神曲』中のベアトリーチェは神学を、ウェルギリウスは理性を、それぞれ寓意すると言われているが、この点でも両作品は見事に対応しており、対話においてアウグスティヌスはまさに理性の化身のごとくペトラルカを糾弾するであろう。

相違があるとすれば、ダンテはウェルギリウスに導かれて、さまざまな罪を犯した亡者たちが罰せられ、あるいは浄められるのを目撃するのに対し、ペトラルカはもっぱら自分自身の罪をアウグスティヌスによって糾弾され、悔い改める点であろう。“Secretum”では対話の形式をとっているものの、自己の罪を俎上にのせる方法は、すでに触れたように、ペトラルカの座右の書であった『告白』の影響を抜きにしては考えられない。「序」のなかには、真理の女神がアウグスティヌスに懇願するさい、教父自身の苦難に満ちた人生を想起するよう要望する一節もあった。半生を振り返って、自己の犯してきた過ちに仮借のない批判を浴びせる厳格なアウグスティヌスを、ペトラルカはみずからの告白の相手に選んだのである。しかし、『告白』を理解するには罪の懺悔を言っただけでは充分でなく、周知のように、それにはいつも神の讚美が伴っている。『告白』執筆の目的は、罪多き人間が回心を経て神の認識へと向かう、曲折はあっても揺るぎない軌跡を、示すことにあった。そのような人生観に対する確信は、至福感となって全篇にあふれているはずだ。ここで再び『神曲』に話を戻したい。もはや多言を要しないであろうが、『神曲』もまた、正道をはずれて迷い込んだ暗い森から出発したダンテが、地獄、煉獄、天国の三界を経巡ったのち、ついに至高天で神の光を仰ぎ見る、という構造をとっている。中世キリスト教の創始者とも言うべきアウグスティヌスと、片や中世思想を総括したと言われるダンテとに共通するこの中世的思考形式を、さて何と呼ぶべきか。本稿ではひとまず *commedia* と名づけておく。訳せば「喜劇」の意味である。中世の詩的伝統によれば、「騒ぎと争いのなかから波瀾に富んだ出発をし、やがて平和と静穏のうちに結末を迎える」⁴⁾ 構成をもつものを指したが、ほかでもない『神曲』に作者が与えた書名が“*Commedia*”であった。中世的思考の根幹をなすと言っても過言ではないこの *commedia* の思考形式を、さて、“Secretum”も同じく共有するのであろうか。この問いに答えるためには、当然のことながら、対話三巻を検討しなければならない。以下にその概略を記す。

まず断っておけば、三日間にわたる対話は一日に一巻が割り当てられている。発言者の表記については、姓のペトラルカではなく、名のフランチェスコが用いられている。第一日の冒頭、アウグスティヌスは哀れなフランチェスコに向かって、人間が死すべき者として本来的に不幸な存在であることの自覚を問いただす。なぜなら不幸な存在であることを認識すれば必ず救済への願望が生じ、願望が生じれば必ず努力するはずであり、努力すれば必ず願いは成就されるからである。幸福を願いながら意に反して不幸な状態に置かれていると嘆くフランチェスコも、師の明晰な論理の前で、ついに意志の弱さを認めざるをえない。なお、“Secretum”を取り上

げる論者の多くがペトラルカの軟弱な性格を指摘するさいに抛り所とするのがこの第一巻である。

二日目は、具体的に七つの大罪の一つ一つについて罪状認否が行なわれる。順に、傲慢、嫉妬、貪欲、貪食、憤怒、邪淫、怠惰が取り上げられ、無罪と認められたものを除いてきびしい追及がなされる。それに対してフランチェスコは無実を主張し、あるいは自己弁護を試みるのだが、最後はアウグスティヌスの叱責を受け入れることになる。

三日目は、フランチェスコの心に最も深い傷を負わせているとアウグスティヌスが断じるところの、愛と名声欲が問題にされる。当然、両者の考えは真向うから対立する。というのは、フランチェスコにとってこの二つは死すべき人間をこの地上から高め、引き上げてくれる、このうえなく高貴なものだからである。しかしアウグスティヌスに言わせれば、現世の事物に対する愛ほど神を看過させるものではなく、そのように断言されて、愛に捕われてから不幸な人生が始まったと告白せざるをえないフランチェスコは、ついに屈服する。そしてさながら医者と患者が相対するように、愛の治療が論じられる。名声についても、なるほどそれは人間の死をも越えて生き長らえるが、しかし永遠の前では無に等しい、とアウグスティヌスが結論するとき、フランチェスコに反論の余地はなかった。

対話の要約を以上に試みたが、おそらく失敗に終わっているだろう。簡略に過ぎたからだろうか。だがもしも詳しく対話を辿っていったならば、私たちはローマ古典の夥しい章句に埋まって窒息してしまっただろう。ケケローと渾名されたペトラルカにしてみれば、それはむしろ望むところであったかもしれないが、その意に反して倫理哲学者の看板を引き降ろしてしまった近代のペトラルカ研究は、対話をして一篇の亜流道徳論たらしめかねないストア派の教えや古典の詩句に惑わされることなく、“Secretum”から別の価値を引き出す必要に迫られた。こうして出てきたのが、本書にペトラルカの告白を聞きとり、その冷徹な内面分析を評価する観点である。しかし、ここでぜひ注意しておきたいことがある。フランチェスコをそのままペトラルカとみなして、彼の秘められた内心を詮索したり、彼の性格を論じたりするのは避けなければならない。フランチェスコの発言が信用できない、などと言うつもりはない。フランチェスコ＝ペトラルカという皮相な解釈に問題があるのだ。アウグスティヌスとの対話はあくまでも一個の架空の作品であり、とすれば当然、対話篇の作者の位置にペトラルカを求めなければならないだろう。言い換えれば、アウグスティヌスとフランチェスコが議論を戦わせる対話全体がペトラルカの精神の内部にひろがる世界なのだ。“Secretum”の正式な書名 *De secreto conflictu curarum mearum*、直訳して「わが思念の秘められた争いについて」⁶⁾はそのことを意味しているに違いない。

さて、フランチェスコに偏ることなく対話全体を包み込む作者の視点を問題にするならば、

“Secretum”が範に仰ぐ『告白』との比較検討が改めてなされなければならない。なぜなら、予想に反して、“Secretum”の世界は暗いからだ。読後、暗澹たる思いに捕えられるのは私ひとりに限らないだろう。こう言うと、愛も名声欲も否定されたフランチェスコに偏った読み方をしたからだ、逆に反論されるかもしれない。しかし、フランチェスコは自分を救うために現われたアウグスティヌスに最終的には屈服し、つまり救われる側に身を置いたはずである。とすれば、暗澹たる思いの原因は、作品全体を司る作者の意識にまで遡るだろう。前述した *commedia* の思考形式をここで思い起こしてもらいたい。『告白』において、回心前の罪深い半生にさえ希望の光をあふれさせたものは、この *commedia* の人生観にほかならない。“Secretum”において、回心にまで至らせながら希望の光を感じさせないとすれば、作者すなわちペトラルカに、*commedia* の思考形式が失われているのだ。*commedia* 的思考を仮にオプチミズムと呼ぶならば、“Secretum”の根底には、ペトラルカのベシミズムが横たわっている。

しかし、断るまでもなく、ペトラルカのベシミズムは救済願望そのものを排除しない。さもなければ、もとより“Secretum”は書かれなかっただろう。真理の女神もアウグスティヌスも地上に降りてはこなかっただろう。救いの手をさしのべに天上から降りてきたはずの聖人は、しかしながら、至福の光をもたらさなかった。怪しむには足りない。対話者アウグスティヌスはペトラルカの内奥から発せられた一つの声にすぎないのだから、フランチェスコに向かってもっぱら理性の重要性を説いたのも同じ理由からだ。その意味で、前述のように、アウグスティヌスは『神曲』のウェルギリウスになぞらえうるが、思い起こすまでもなく、ラテンの大詩人は煉獄までしか案内を許されなかった。アウグスティヌスに導かれたフランチェスコが天上の光を見るに至らなかったのも道理である。“Secretum”は、言わば、天国篇を欠いた魂の遍歴物語だ。天国を知らず、救済の思想を知らなかった古代の哲学者や詩人を、その叡智に満ちた言葉の数々を、遍歴の道しるべとしてペトラルカは配した。そして聖アウグスティヌスが、一面において、傑出した古代的知性の持主であったことは、言い添えるまでもないだろう。

“Secretum”の核心にあると思われる問題を以上を探ってみたが、それと関連づけて考察されるべき他の興味深い問題点を二、三指摘しておこう。

トスカーナ地方を中心に盛えたイタリアの中世文化が中世コムーネ社会の基盤のうえに成立し、その代表者ダンテがフィレンツェ市民の一員として思想形成を果たしたことは、改めて言うまでもない事実だが、ペトラルカの生きた14世紀はちょうどそのコムーネ社会の解体期に相当している。ダンテの追放と前後してフェレンツェを追われた一公証人を父にもつペトラルカは、まさに歴史の転換期を身をもって生きるべく生まれついたと言えるだろう。“Secretum”執筆の直接の契機として通常まず挙げられるのが弟ゲラルドの出家であり、この出来事がペト

ラルカの心を激しく揺すぶったであろうことは、本書の到る所に見出せる俗世批判からも容易に察せられる。だが修道院とコムーネに支えられた中世はすでに終わりを告げようとしていた。この社会のなかで生きるべき新たな場所を、すなわち知識人の新しい生き方を、ペトラルカは模索しなければならなかった⁹⁾。キケローやウェルギリウスにおそらく倣ったと思われる、ヴォクリューズにおける隠遁生活は、その模索が辿りついた一つの答えをよく語っているが、同様に、“Secretum”の精神の対話が人里離れた場所を選ばなければならなかった理由もこの観点から探られてよいだろう。

しかし、世俗を嫌悪することと社会に関心を払うこととは別である。“Secretum”はもっぱらペトラルカ個人の問題を素材としながらも、「序」が述べるように、社会への眼差しを忘れてはいない。ペトラルカが“Secretum”を書いたのはアヴィニョンの地で、当時ここには教皇庁が移されていた。世に言うアヴィニョン虜囚である。幼くしてイタリアの地を去ってこのかた、彼の生活の本拠はおおむねアヴィニョンとその周辺に置かれていた。第三巻で愛の治療が語り合われるさい、アウグスティヌスは療法の一つとしてイタリア帰国を勧めるのだが、ここからペトラルカのイタリア統一に寄せる関心を汲み取るのは穿ち過ぎだろうか。激しい口調で非難しつづけた教皇庁の墮落から身を遠ざけるべきだと考えるのは当然であるし、望郷の念が働いているであろうことも否定しない。だがいま問題にしたいのは、イタリアという理念にペトラルカが与えようとしている形である。当時、イタリアは理念のなかでしか存在しなかった。ダンテも、ペトラルカも、そして統一が成るまでのすべての知識人にとって、最大の社会的発言は、イタリアの理念を語ることであった。アヴィニョンからイタリアに向けられた眼差しは、その理念がペトラルカにおいてどのように形作られたかを示唆してあまりあるように思われる。アヴィニョン虜囚による教皇権の失墜が西欧中世の崩壊につながるであろうことをおそらくペトラルカは正しく直観していたに違いない。彼のイタリアは西欧中世に取って代わるものとしてあった。そして中世ラテンを飛び越えて直接、古典ラテンに赴こうとしたことから明らかのように、古代ローマとの連続の意識のうえにペトラルカにおけるイタリアの理念は形成されたと言えるだろう。パリではなくローマで桂冠を受けることを望んだのもやはりイタリアの理念に関っている。

最後に、愛の問題について一言しておかなければならない。愛は『カンツォニエーレ』の詩人にとって最大の難関であり、じじつ“Secretum”においても、フランチェスコの心に最も深い痛手を負わせている病いとしてひととき長く語り合われるからである。しかし、長い議論の末に、高貴な愛もついに否定されてしまう。ペアトリーチェへの愛がダンテをして天の高みにまで昇らせたのと引き較べ、何という違いだろうか。その原因についてはすでに述べたつもりであるが、いまそれを別の言葉に置き換えるならば、愛を主題とする中世俗語詩の伝統がペト

ラルカにおいて重大な危機を迎えたのである。その危機にあって失われゆく愛をどのように救おうとしたか、それを知るには、やはり『カンツォニエーレ』を繙かなければならないだろう。

注

- 1) Umberto Bosco, Francesco Petrarca, Laterza, 1968, p. 15 を参照。
- 2) 渡辺友市による邦訳がある。世界文学大系 74『ルネサンス文学集』筑摩書房, 1964 に所収。
- 3) Gianfranco Contini, Letteratura italiana delle origini, Sansoni, 1970, p. 646 を見よ。
- 4) Vittore Branca, Boccaccio medievale, Sansoni, 1956, p. 35.
- 5) Petrarca, Opere latine, UTET, 1975 所収の“Secretum” のイタリア語訳において, Antonietta Bufano は L'intimo dissidio dei miei pensieri「わが思念の内なる争い」と訳している。
- 6) 社会における知識人のあり方をペトラルカにおいて問題にする観点は, Alberto Asor Rosa, Sintesi di storia della letteratura italiana, La Nuova Italia, 1972, p. 38 以下を参照。